

アバ・ラーナーと外国貿易（1）

——費用条件と需要条件——

木 村 雄 一

I は じ め に

アバ・ラーナー（Abba Lerner, 1903-1982年）は、『統制の経済学——厚生経済学原理』（Lerner [1944]）の著者として名高い。それは、副題に「厚生経済学原理」と付されているように、「新厚生経済学」の中心的な考え方である「限界原理」（限界費用＝価格）に依拠して、「自由放任」とは異なる「経済的自由主義」としての「統制経済」¹⁾を達成することを目標とした著作である。しかしながらラーナーの外国貿易に関する理論的貢献も重要である。なぜなら彼は、経常収支の均衡が回復する「長期」の定常状態に関して、オファー曲線を用いて輸出税と輸入税の効果は全く同一となることを明らかにし、さらに輸入の弾力性と輸出の弾力性の和が1より大きければ、貿易均衡が安定になることを示したからである。前者は「ラーナーの対称性の定理」（Lerner [1936]），後者は「マーシャル＝ラーナーの条件」（Lerner [1944]）と呼ばれる。こうした外国貿易論に対するラーナーの貢献は、どのようにして形成されたのであろうか。

1) ラーナーの「統制の経済学」は「自由放任の経済学」と対峙する意味がこめられているが、「私有財産制度の廃止」を主張する「集産主義」「社会主義」と同じではない。それは、「資本主義経済（私的企業）」と「集産主義経済（集産的な所有と運営）」の利点を取り入れて、「雇用」「独占」「所得の分配」の問題に社会的利益の見地から答えを与えるものである。したがってラーナーは、個人の政治的・経済的自由を認める経済的自由主義の世界観から、民衆の利益や厚生を重視する純粋な集産主義と純粋な資本主義を想定することで、理想的な「統制経済」を目指していた（Lerner [1944] 邦訳 1-9 ページ，桜井 [1961]）。

ラーナーは、1932年に LSE の学部生として「国際貿易の費用条件における図解的表現」(Lerner [1932])を公刊し、ハーバラーによる「機会費用」としての「生産無差別曲線」(Haberler [1930])を「消費無差別曲線」と結びつけることで、はじめて外国貿易の二国間均衡を示した²⁾。そして彼は1934年に「国際貿易の需要条件における図解的表現」(Lerner [1934a])を公刊する。ここでは、前論文において用いた「消費無差別曲線」を用いない分析手法を検討し、さまざまな需要条件を示した。

さらに1952年に公刊された「要素価格と国際貿易」(Lerner [1952])は、ラーナーによって1933年12月の LSE セミナーで報告された論文であり³⁾、サミュエルソンによる「要素価格均等化証明」(Samuelson [1948], [1949])に先駆けた業績である。サミュエルソンは次のように言う。「国際的な費用と需要を扱った彼の古典的な1932年の論文と1934年の論文の間に、ラーナーは、要素が移動できなくても、財における自由貿易が国際的な要素価格均等化を果たす条件についてすばらしい証明を書いたが発表しなかった。ラーナーの論文の再発見は再び話す価値がある。わたくしが同じ結果を1948年に発表した後、ロビンズ卿が同じようなラーナーの論文をファイルにもっていたと思うとわたくしに話した。彼の記憶力が明らかにラーナーよりも優れていた。彼はこの珠玉

2) はほぼ同時期にレオンチェフ (Leontief [1933]) とヴァイナー (Viner [1937]) もラーナーと同様の分析を展開していた。サミュエルソンは次のように言う。「ハーバラーの P-P 曲線 [生産無差別曲線のこと] をその問題に応用するときに熟していたのであり、レオンチェフを別にすれば、ヴァイナーもまたわが国や外国で行った講義でこの分析を展開していた。しかしながら、等しい傾きを合わせたり不等号を現代の形に一般化したりして、どうやったら P-P 曲線が最適に『加えられる』かを示すときの芸術的妙技という点では、誰もラーナーには匹敵しない」(Samuelson [1964] 邦訳300ページ、〔 〕は引用者による)。

3) これについてはシトフスキーが次のように証言している。「なぜそれ『要素価格と国際貿易』(Lerner [1952])が1934年に出版されなかったのかという理由は、ラーナーの学生たちの間で受け入れられている、あるお話によって説明されるだろう。1935年、私はラーナーの学生の一人であった。ある学生がラーナーの複数の原稿の一つを雑誌に投稿するために清書していた。しかし彼女が家に帰る途中で、バスの上にそれを置き忘れ、それをみつけることができなくなってしまった。それはラーナーのたった一つの校正原稿であった。ラーナーは、当時ほかのいくつかの論文を執筆していたので、失った原稿をわざわざ書き直すことができなかった」(Scitovsky [1984] p. 1554、〔 〕は引用者による)。

を掘り出し、この珠玉は17年ぶりに1950年の『エコノミカ』にあらわれた。ただ一つの論理しかないと思いつながら、われわれの研究の類似性は驚くべきものである」(Samuelson [1964] 邦訳302ページ)⁴⁾。

ラーナーの外国貿易論は、30年代のLSEにおける「ロビンズ・サークル」のうちで形成された⁵⁾。しかしながらラーナーは、「ラーナーの対称性の定理」や「マーシャル＝ラーナーの条件」の発見者としてその名をとどめていても、これまで学史の対象として、彼の外国貿易論は検討されていない⁶⁾。

本稿では、上述した外国貿易に関する初期の理論的論文「国際貿易の費用条件における図解的表現」「国際貿易の需要条件における図解的表現」「要素価格と国際貿易」(Lerner [1932], [1934a], [1952])を射程に入れて、ラーナーの外国貿易の理論構造を明らかにすることで、外国貿易論における彼の理論的貢献の意義と限界を示し、ひいては「ロビンズ・サークル」において展開された大陸経済学の様相を明らかにすることを目的とする⁷⁾。

本論文は、論文(1)と論文(2)に分かれる。まず論文(1)では、ラーナーによる外国貿易の限界条件の幾何学的探求について、需要条件と費用条件に分けて、それぞれ議論する。その上で、ラーナーがそれらの条件において示したことをまとめ、彼の外国貿易論に対する理論的貢献を確認する。その次に論文(2)では、ラーナーがサミュエルソンに先駆けて証明したとされる「要素価格均等化」について、サミュエルソンの定理と対照しつつ、議論する。そ

4) サミュエルソンは、1950年と著しているが、1952年の誤りである。したがって、17年ぶりではなく、19年ぶりを書くべきであろう。

5) サミュエルソンは次のように言う。「ジョン・ヒックスがLSEのクラスで彼[ラーナー]の資質を発見し、ライオネル・ロビンズの注意を喚起したのは、彼が26歳のときであり、彼の最初の論文が出たのは彼が28歳のときであった。(中略)疑うべくもなく、ラーナーは正しい場所に正しいときに現れた。LSEでは、ライオネル・ロビンズが、アレン、ビクター・エーデルベルグ、ヒックス、ニコラス・カルドア、ポール・ローゼンシュタイン、アーシュラ・ウェップ・ヒックス等の名前を含んだグループの若き教授であり、師であり、友人であった。なんとすばらしい集まりだ！」(Samuelson [1964] 邦訳297ページ、[]は引用者による)。

6) ラーナーの先行研究として、Samuelson [1964], Scitovsky [1984], [1998]による評価が存在するのみである。

7) ここで述べる「大陸経済学」は、「ロビンズ・サークル」において研究された「オーストリア学派」や「ローザンヌ学派」の経済学を指す。

の上で、「要素価格均等化」に対するラーナーの先駆性と限界について、議論する。最後に、論文(1)(2)全体の議論を踏まえて、なぜ彼がこのような外国貿易論を展開したのか、について示したい。

II 外国貿易の限界条件の幾何学的探求

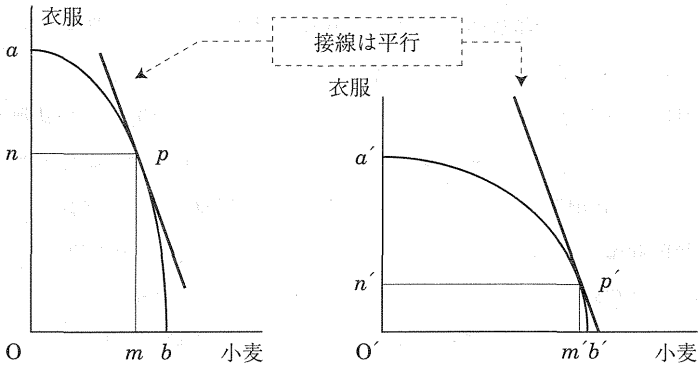
1 費用条件

1) 生産無差別曲線と消費無差別曲線による均衡条件

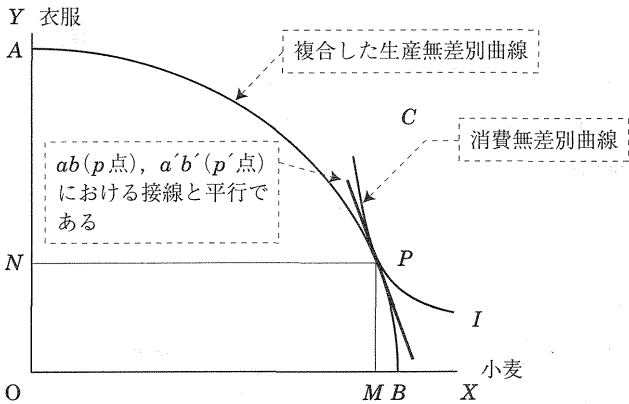
第1図は、二つの国が小麦と衣服を生産していることを示す。横軸を小麦の生産量、縦軸を衣服の生産量とすれば、両国の「生産無差別曲線」は ab , $a'b'$ と描ける。どちらの「生産無差別曲線」も原点に対して凹の形状であるのは、 $a(a')$ から $b(b')$ にかけて、一方の商品の生産を犠牲にすることで他方の商品の生産にかかる限界費用が増加する条件を考慮しているからである（「相対費用逓減の法則」）。図における $p(p')$ 点は、 $np(n'p')$ の小麦と $mp(m'p')$ の衣服を生産する点である。そのとき、両国の「生産無差別曲線」を足し合わせれば、第2図のように描ける。Y軸に $OA=oa+o'a'$ となるA点がかけ、X軸に $OB=ob+o'b'$ となるB点がかける。 ab と $a'b'$ を順に加えていけば、 AB は両国を合わせた「生産無差別曲線」である。 OA は両国の衣服の生産量、 OB は両国の小麦の生産量となる。

ここでラーナーは国際貿易の均衡条件を示すために、「消費無差別曲線」を考案する。「消費無差別曲線」は、需要条件の論文(Lerner [1934a])で利用が撤回される概念で、サミュエルソンが批判した「社会無差別曲線」に他ならない(Samuelson [1956])。しかしこの時点でのラーナーは、「消費無差別曲線」は利用可能であると主張する。すなわち「消費無差別曲線は、それらの形状が資源の分配に依存して、実際の生産に影響されるから、純粋な『無差別』曲線ではないと反対するかもしれない。しかしながらこれは問題ない。なぜなら共同体は、絶対的な満足によって、無差別曲線上の様々な点に対して、『無差別』であると決して主張することはできないけれども、これらの曲線に関す

第1図 小麦と衣服を生産する二つの国の生産無差別曲線 (収穫逓減)



第2図 複合した生産無差別曲線と消費無差別曲線



る共同体の「行動」は真の無差別曲線に関する個人の行動と厳密に比較できるからである」(Lerner [1932] p. 87)。

第2図の CI が「消費無差別曲線」である。それは「生産無差別曲線」 AB と P 点で接するから、 P 点で接線が引ける。また第1図の ab , $a'b'$ に対して、 P 点における接線と平行な接線が引ける。このとき P , p , p' から垂線を引けば、 PM , PN , pm , pn , $p'm'$, $p'n'$ が得られ、 $OM = om + om'$, $ON = on + on'$ が成立し、両国は均衡状態にある (*ibid.*, pp. 88-90)。

2) 「パレート最適」と「収穫逦増」

こうしたラーナーの議論は、最適な生産量を求めるために「限界条件」を幾何学的に示した点で、パレートの影響を強く受けている⁸⁾。しかしラーナーの議論で興味深い点はこの先にある。というのは、パレート流の「最適概念」を求めるためには、必ず「収穫逦減」や「収穫一定」を仮定する必要があるが、ラーナーは、「費用逦増」(原点に対して凹)や「収穫一定」(直線)ばかりでなく「費用逦減」(原点に対して凸)の場合を射程に入れ、両国間の「生産無差別曲線」の形状について考えられる全ての場合を丹念に検討したからである。すなわち、(a) 二つの〔図形の右上方に対して〕凸曲線ばかりでなく、(b) 一つの凸曲線と一定の直線、(c) 凸状が凹状に比べて大きい一つの凸曲線と一つの凹曲線、さらに(d) 二つの凹曲線ばかりでなく、(e) 一つの凹曲線と一定の直線、(f) 凹状が凸状に比べて大きい一つの凹曲線と一つの凸曲線、(g) 二つの直線と (h) 凹性と凸性が全く等しい一つの凹曲線と一つの凸曲線」(*ibid.*, p. 93, [] は引用者による)。

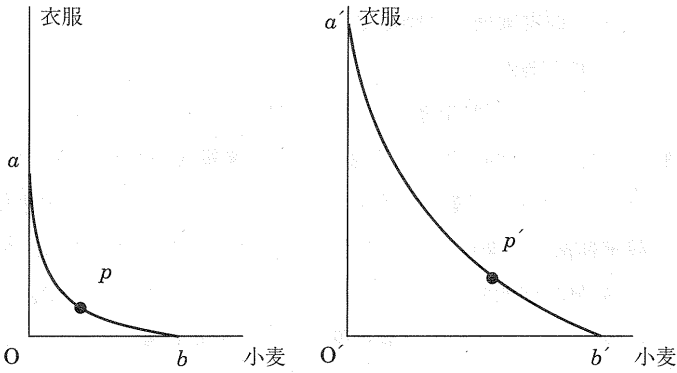
3) 「収穫逦増」への拡張

第3図は、第1図と同様に二つの国が二つの商品を生産しているが、「生産無差別曲線」は原点に対して凸の形状であることを示す。凸の形状をもつ「生産無差別曲線」は、一方の商品の生産を犠牲にすることで他方の商品の生産にかかる限界費用が逦減することを意味するから、「収穫逦増」の場合である。

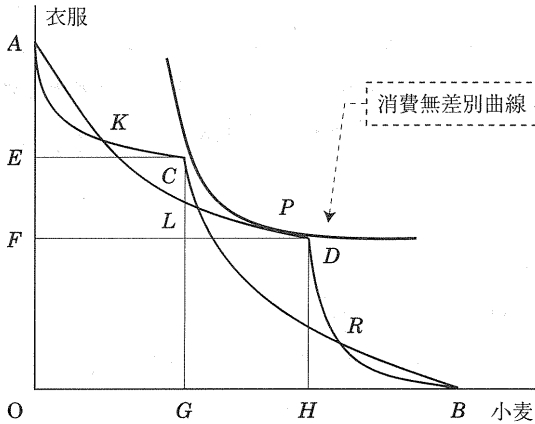
第4図は、第3図での両国の「生産無差別曲線」を足し合わせた「複合した生産無差別曲線」を示す。 $AEC=DHB=aob$, $AFD=CGB=a'o'b'$ が成立し、 ACB と ADB は aob と $a'o'b'$ から構成されている。「複合した生産無差別曲線」はそれらを様々な順序に並べて描くことができるので、「有効な」生産無差別曲線は $AKCLDRB$ である。ここで $AKCLDRB$ と接する「消費無差別曲線」を描き、そのときの接点を点 P とすれば、両国の生産量の組み合わせは、

8) 「パレート改善」「パレート最適」の考え方を初めて「図解的」に示したのは、ラーナーの「独占の概念と独占力の尺度」(Lerner [1934b])である。

第3図 小麦と衣服を生産する二つの国の生産無差別曲線 (収穫増)



第4図 複合した生産無差別曲線 (収穫増) と消費無差別曲線



点 P に一致した p, p' となる。

このとき突出した点 C と D は、「費用通減」「規模の経済」が実現されるばかりでなく「消費無差別曲線」が最大に位置するので、「特化」を示す。点 K と L と R は、 ACB と ADB 上にある。しかしそれらの点では、「消費無差別曲線」が最大に位置するとは限らず、商品の相対価格も不確定である。した

がって最終的に点 *C* と *D* の「特化」に落ち着く⁹⁾ (*ibid.*, pp. 94-95)。これがラーナーによる「収穫通増」の図解である。

4) 四つの「費用条件」

ラーナーはこうした「費用条件」を次の四点にまとめた。第一に、「相対(限界)費用」が二つの国で等しくなるように生産編成が行われる必要がある。すなわち「平行な接線」が条件である。第二に、少なくとも一つの国は、「費用通増」(収穫通減)の条件下で、生産する必要がある。すなわち、少なくとも一つの「生産無差別曲線」は、右上方に凸(原点に対して凹)であることが条件である。第三に、これらの「費用通増」は「費用通減」に比べて急速に増大する必要がある。すなわち一方の「生産無差別曲線」が、右上方に凹(原点に対して凸)であるならば、他方の「生産無差別曲線」は、右上方に凸(原点に対して凹)でなければならないが、その凸状(原点に対して凹)は凹状(原点に対して凸)に比べて大きいことが条件である。第四に、二国が等しい「相対(限界)費用」で生産する必要がある。すなわち「消費無差別曲線」は、平行な接線の点で複合した「生産無差別曲線」に接することが条件である(*ibid.*, pp. 98-99)。

2 需要条件

1) 「消費無差別曲線」に対する「弁護」

サミュエルソンは、「社会無差別曲線」(Samuelson [1956])において、「消費無差別曲線」の取り扱いについて次のように述べた。「この工夫[消費無差別曲線]を最初に使用した(あるいは示唆した)論文がラーナーの1932年論文[Lerner [1932]]である。そして実にラーナーは、1934年論文[Lerner [1934a]]の冒頭部分において、個人無差別曲線の使用の有効性から類推すれば、社会無差別曲線の使用も有効であると、まことしやかに再説している。国際貿易に関するレオンチェフ W. Leontief の有名な論文の中でも、社会無差別

9) この手続きは、2)で述べた(e)と(f)の場合にも適応できる (Lerner [1932] p. 95)。

曲線の使用がみられる」(Samuelson [1956] 邦訳55ページ、下線と〔 〕は引用者による)。サミュエルソンが下線部のように述べるのは、ラーナーが「消費無差別曲線」に対する「浅薄な弁護」(Samuelson [1964] 邦訳301ページ)を以下の三点ほど主張したことによる。

第一に、共同体ではよい暮らしや貧しい暮らしをする様々な人々がいるので、共同体そのものの厚生を論じることとはできないから、共同体の無差別曲線を描くことはできないという反対がある。しかし個人の無差別曲線が行動主義 (behaviorism) の見地から説明でき、共同体に属する個人も意志決定をするから、共同体の意思決定も個人のそれと同じ手続きを踏むことが可能である (Lerner [1934a] p. 102)。第二に、共同体では個人の分配は生産物に依拠するので、「生産無差別曲線」と「消費無差別曲線」をバラバラに描くことはできないという反対がある。しかしながら消費無差別曲線ばかりでなく「集団」無差別曲線を考えるならば、こうした反対を覆うことができる (*ibid.*, pp. 102-103)。第三に、こうした二つの批判を避けるには、「連続的」な無差別曲線ではなく、限界代替率や相対価格の知識だけを考慮した無差別曲線を考えればよい。もちろんこれらの傾きは消費無差別曲線の体系の一部としてみなされる必要はない。なぜならそれが経路にそって動くにつれて、体系は形を変えるからである。個人や共同体は、これらの経路に沿って動き、ついには傾きが経路に接することで均衡するが、複数均衡が存在する可能性もある (*ibid.*, p. 103)。

こうしてラーナーは、それら三点が「消費無差別曲線」の問題に対する最も単純な対処法であるとし、「消費無差別曲線」の利用を「弁護」する。

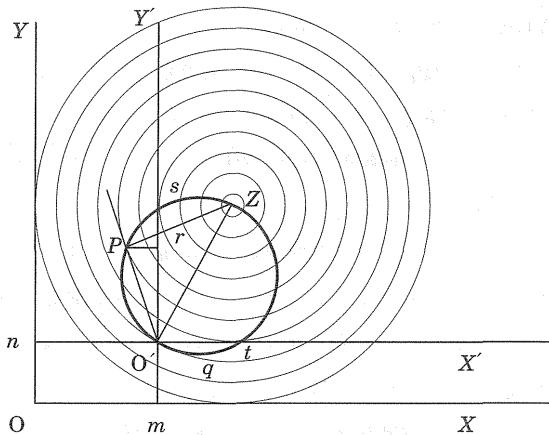
2) 円形の「消費無差別曲線」

しかしながらラーナーは、「消費無差別曲線」に対して新しい接近方法を用いる。以下に引用しよう。

個人の無差別曲線を想定しよう。効用が逓減する一般的な仮定にしたがえば、我々は、彼の無差別曲線が左から右下がりに傾斜し原点に対して凸であることを、理解する。この曲線を右側に追跡するならば、我々は、そ

れがだんだん平坦になることがわかる。そしてついには、水平になる点に到達する。この点において、商品 X の限界効用はゼロになる。というのも、 Y の量のいかなる変化も無しに、 X の数量のわずかな増加によって、我々は同じ曲線の上にいるからである。もしそれが X 軸に到達し、水平になる前に消滅するならば、我々はより高い曲線を取らなければならない。そして最終的には、我々は、水平になる曲線を得るだろう（商品に対する欲望が貪欲でなければ）。そして、 X の追加的な数量が個人に対して無差別である限り、いくどきか水平であり続ける。しかしある時以降、追加的な X が不快になる。その場合、もし商品 Y のいくらかの追加によって埋め合わせされるならば、我々の〔想定する〕個人は、非商品 X の追加と無差別になるであろう。その曲線は上向きに転換する。非商品 X と商品 Y が逓減する効用が増大する程度とともに、彼は、自分が苦しまなければならない X の追加的な効用を埋め合わせるために、よりいっそうの商品 Y を必要とする。その曲線は上向きに急勾配するようになり、ついには垂直になるであろう。この状態が生ずるのは、 Y の限界効用がゼロに陥るときである。このとき、我々の〔想定する〕個人はいかなる Y の追加物によっても X の追加的な量を補償することができない。 Y の追加的な数量が無差別である限り、その曲線が上方に垂直であり続ける。しかし Y もまた不快になり、非商品になると、我々の〔想定する〕個人は、もし Y のいくらかの追加が彼を無差別な位置に置くまであれば、何らかの方法で補償されなければならない。彼に X をよりいっそう与えることは、彼を補償することにはならない。というのは、この場合において X は非商品だからである。しかし彼は、 Y にくらべてより少ない X について苦しむことによって、補償されうる。このことが意味するのは、曲線が後ろ向きになることであり、左上方へ向かうことである。それら非商品の逓増する負効用が、曲線をいっそう左に向かわせるであろう。そしてそれは下向きにくぼんでいく。

第5図 円形の「消費無差別曲線」



もちろん我々が別の方向に消費者無差別曲線を続けていけば、同じような曲線を手に入れることができる。(中略) そのような一連の同心円的な消費無差別曲線は「第5図」のように示せる。Zは「至福状態 (Bliss)」の点であり、体系の中心である。(ibid., pp. 103-104, 下線と〔 〕は引用者による。「第5図」は本論文に合わせた)

この記述にしたがって描いたものが、第5図である。

この図では、Z(至福状態)点を中心に円形の無差別曲線が引かれている。O'点は、個人が所持している商品の量を示す。Xを m 個、Yを n 個所持していることになる。O'を出発点と考えれば、個人がどれくらいXとYの商品を交換するのかについて、いかなる市場価格やいかなる方向においても考えることができる。交換する点(貿易志向する点)をPとすれば、O'Pの傾きは交換線を示す。したがってその線上をO'からPにむかって個人は移動していく。Pは個人の主観的選好が市場の交換率あるいは客観的な選好規模と一致する。すなわちP点では、Prをあきらめる代わりにO'rを入手する。

こうしてラーナーは、様々な円形の消費無差別曲線に対して、交換する点を考えていき、それらを結べば、図の太い線で示されたような「需要曲線」を描

くことができると考えた。

3) 貿易志向曲線 (willingness to trade)

「需要曲線」 $O'Ps$ と $O'qt$ の部分は、なじみ深いマーシャルの「貿易志向曲線」(オファー曲線)である。 O' を出発点として、 $O'X'$ と $O'Y'$ を軸としよう。それは、個人によって消費され所持される X と Y の量ではなく、個人が交換の際に取引する量のみを示している。

貿易が生じる場合は、いかなる交換線も O' を通じてある点で「需要曲線」を横切る。交換線 $O'P$ をみるならば、 $O'r$ にそって正で測定される Y の数量が獲得される一方、 Pr にそって負に測定される X の数量があきめられる。垂直な交換線 $O'rs$ は、 X の所持を変化させなくても Y を手に入れられることを意味する一方、水平な交換線 $O't$ は、 Y の所持を変化させなくても X を自由に手に入れられることを示す。これは自由財の場合である。交換線が正に傾けば、 X のあらゆる獲得も Y の一定の比例した増大を伴うので、もっとも利益が得られる交換線は $O'Z$ である。したがって交換線は、「至福状態」の Z 点にむかって変動する (*ibid.*, pp. 107-108)。

4) 需要曲線と生産無差別曲線との対面

こうしてラーナーは、円形の「消費無差別曲線」から「需要曲線」を導出するが、この「需要曲線」は「生産無差別曲線」の場合にもあてはめられる、と考えた。これが第6図である。

ある個人が「生産無差別曲線」 AB 上の点 P で生産すると考え、点 Q が需要量だとしよう。太線で描かれた「需要曲線」は、「生産無差別曲線」と「消費無差別曲線」の接線が等しい条件を満たすような「消費無差別曲線」上のあらゆる点の軌跡である。このとき個人の生産量は X 軸の OM と Y 軸の ON であるが、需要量が Q なのだから、交換率は PQ の傾きによって示される。すなわち個人は、 P から Q へ移動して、 X の PR を Y の RQ と交換することで取引が成立する (*ibid.*, pp. 108-109)。

線」 ACB をみるならば、 A か B のどちらからでも引けるいかなる直線も、個人を「消費無差別曲線」の体系における π と同じ高さに「少なくとも」移動させるからである。他方、「収穫一定」の場合は、「生産無差別曲線」 $A\pi B$ で示される。この線の傾きによって示される交換率をみるならば、 π が消費点になる。

これらの場合、「需要曲線」は A と B からひかれる接線によって示されるから、 A と B から「消費無差別曲線」の点の中心 Z まで引ける。したがって「需要曲線」は二つの円形の「需要曲線」 $\pi TZUA$ と $\pi BVZS$ から構成される。しかし「消費無差別曲線」と「生産無差別曲線」は接線を挟んで対極に位置するから、「需要曲線」は πTZ と πSZ から構成される。しかし「収穫一定」の場合は、「生産無差別曲線」の他の点で生産する可能性を考慮に入れる必要がある。 $A\pi B$ の傾きによって示される価格において、 $B\pi$ ないし $A\pi$ まで交換できる。もちろんこれは「費用逓減」の場合は当てはまらない。

したがって、「収穫一定」における「需要曲線」は $A\pi TZS\pi B$ であり、「収穫逓増」における「需要曲線」は $\pi TZS\pi$ となる (*ibid.*, pp. 109-110)。

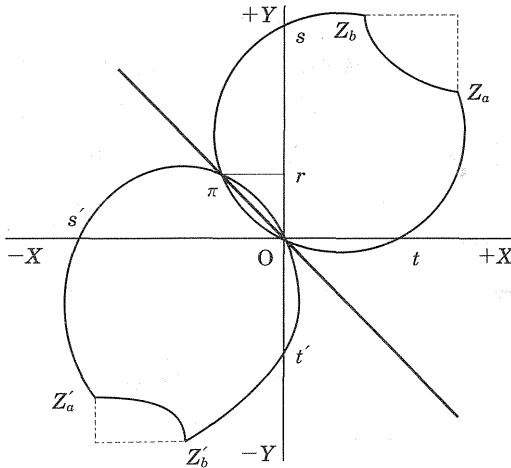
6) 「需要曲線」の導出——足し合わせる方法

ラーナーは、以上から導出された「需要曲線」を費用条件で議論した「複合した生産無差別曲線」の考え方 (Lerner [1932]) と結びつけることで、「新たな」貿易条件を探った。

第6図を用いて説明しよう。二つの国の「生産無差別曲線」 ab や $a'b'$ から得られる「複合した生産無差別曲線」 AB を考え、 AB 上の点 P において、点 p 、 p' において引ける平行な接線と同じ傾きを持つ平行な接線が引ける、とする。ここで、第6図における点 Q を、二つの国の点 q と q' とするならば、これらの線はそれぞれ需要曲線 πszt 、 $\pi's'z't'$ を横切るか接するかである。先述した「費用条件」から、この図における「複合した生産無差別曲線」上の点 P における接線 PQ は、それぞれの国の接線 pq 、 $p'q'$ と平行である。

したがって両国が同じ方向に貿易志向 (交換) すれば、 $PQ=pq+p'q'$ の長

第8図 貿易志向曲線とオファー曲線



さになる。しかし一方の国が pq , 他方の国が $p'q'$ ほど貿易志向 (交換) すれば, これらは均等かつ対極だから, $PQ=pq+p'q'=0$ となる。

こうして「需要曲線」は, 「無制限」に「足し合わせること」ができる。いかなる比較も様々な個人の効用の追加もなしに諸国の「需要曲線」を構築でき, それと同時に諸国における生産の分配も決定される (*ibid.*, pp. 110-113)。

7) 貿易志向曲線とオファー曲線

二国間貿易の場合を検討しよう。第8図は, 第一象限は X と Y の正の数量を, 第二象限は X が負, Y が正の数量を, 第三象限は X と Y の負の数量を, 第四象限は X が正, Y が負の数量を示す。第一国の貿易志向を第二国の貿易志向と関連させるならば, 第一国と第二国がそれぞれ獲得する同じ財の数量は相反する。すなわち, 第一国の獲得する財の数量が負であれば, 第二国の獲得する同じ財の数量は正となる。

6) でみたように, pq と $p'q'$ は第一国と第二国の貿易志向であるとするならば, $pq, p'q'$ はそれぞれ貿易志向曲線 $otz_az_b\pi o$, $ot'z'_az'_b\pi o$ を与える。この場合, πo の傾きによって示される価格率においてのみ, 需要と供給は一致し, それ

が第一国と第二国の交換均衡率となる。第一国は X の πr をあきらめる一方、第二国は πr を手に入れる。このように $p'q'$ は pq と対極にあり、 πo において一致する。したがって、第二象限に描かれた図は、なじみ深いマーシャルの「オファー曲線」である。二つの円が原点で接するならば、両国の貿易は行われない。嗜好と生産条件が二国間で同じであれば、二国の需要曲線は原点について対称的であるから、原点に接する (*ibid.*, pp. 114-115)。

こうして、二国間貿易の条件を示すことができるが、なぜ第8図で需要曲線 $z_a z_b (z'_a z'_b)$ が破壊されているのであろうか。これは、第6図の「至福状態」を考慮する必要がないからである。「至福状態」 Z 点には、 A と B のどちらからでも、到達できる。 A から到達する場合は、交換線は AZ であり、 A から交換線によって到達され、直径 AZ をもつ円である。 B から到達する場合は、交換線は BZ であり、直径 BZ をもつ円である。これらは、第一国と第二国にも適応できるのだから、直径 az と bz を持つ円である。それゆえ、 pq あるいは需要曲線 πqsz と一致する交換数量や方向は、貿易志向曲線 $o\pi szb$ で示される。同様に、他の需要曲線の半分 πtz は otz_a である。したがって $z_a z_b (z'_a z'_b)$ を考慮する必要はない (*ibid.*, pp. 115-116)。

III ラーナーが費用条件と需要条件において示したこと

1 収穫逓減・収穫一定・収穫逓増

ラーナーは、国際貿易の費用条件と需要条件を探求する中で、「収穫逓減」「収穫一定」ばかりでなく「収穫逓増」の場合についても議論している。ラーナーと同時期に同じような議論を展開したハーバラー、ヴァイナー、そしてレオンチェフが描いた「生産可能性曲線」は、全て原点に対して凹の場合（「収穫逓減」の場合）であった。ラーナーの外国貿易論は、「収穫逓減」「収穫一定」「収穫逓増」について考えられる全ての場合を扱っている点に、その独自性をみることができる。

「収穫逓増」の場合は、「特化」の可能性を示すばかりでなく、「複数」均衡

の可能性が存在するので、決して安定的な外国貿易状況にはならない。ラーナーがそうした不安定な外国貿易条件も考慮した背景として、ラーナーが「ロビンズ・サークル」の一員であったことが考えられる。「ロビンズ・サークル」においては、均衡の安定性についてだけでなく、均衡の不安定性についても議論され、さらにロビンズやカルドアが収穫逓増についての議論を深めていた¹⁰⁾。しかしラーナーは、「収穫一定」や「収穫逓増」を鋭く考察しているにもかかわらず、完全競争を仮定して、「費用条件」「需要条件」の「均衡」条件を探っている。すなわちヒックスが『価値と資本』において示したように、生産関数が収穫逓減でなければ、均衡を得ることは不可能なのである。この点では、ラーナーは、ヒックスと同じように「均衡」を重視していた。したがって、ラーナーは「限界主義者 (価格=限界費用)」の域を抜け切れていなかった。

2 「貿易無差別曲線」の議論の原型

ラーナーの費用条件・需要条件における「需要曲線」をみるならば、ミードの『国際貿易の幾何学』(Meade [1952])における「貿易無差別曲線」¹¹⁾の「基礎」を提供している。なぜなら、ミードの四つの象限を用いた議論は、ラーナーの議論と形は違うとはいえ、ほぼ同じ内容を示していて、「消費無差別曲線」と「生産可能性曲線」から、「オファー曲線」導出を試みているからである。この意味で、ラーナーの議論は、現代の国際貿易論の基礎を提供している。

3 足し合わせることによる「需要曲線」と「消費無差別曲線」の放棄

ラーナーは、1932年の費用条件の論文で、均衡条件を求めるために、「消費無差別曲線」を用いた。しかし、1934年の需要条件の論文においては、「消費

10) 均衡の不安定性については、Kaldor [1934a], Robbins [1935], Rosenstein-Rodan [1934], 収穫逓増については、Kaldor [1934b], [1935], Robbins [1934] において議論されている。

11) 貿易無差別曲線は、「社会無差別曲線」が前提とされるならば、一定の実質所得を保証するように、輸出と輸入の組み合わせを図示したものである。

無差別曲線」を用いず、「足し合わせる」ことによる「生産無差別曲線」を「需要曲線」導出に適應することで、「消費無差別曲線」の問題を回避した。彼は、共同体の「消費無差別曲線」を放棄し、「足し合わせる」ことによって「需要曲線」を導出している。これは「生産可能性曲線」を「いくらでも」「足し合わせる」ことが可能であることを示す。この意味でラーナーは、ジェヴォンズ、ワルラス、エッジワース、マーシャルの分析に追いつき、それを精緻な幾何学分析を用いて論証したことで、汎用性の高い外国貿易論を構築した。

IV お わ り に

以上の検討から、ラーナーによる国際貿易の費用条件と需要条件の理論構造は、「限界費用＝価格」としての「限界原理」によって貫かれていることが確認された。次稿では、ラーナーの要素価格均等化の証明について、詳細に検討したい。

参 考 文 献

- Barone, E. [1927] *Grundzüge der Theoretischen Nationalökonomie*. Trans from Original Italian ed. of 1908. (清光照夫訳『競争・独占・恐慌の厚生理論：経済学原理』文雅堂書店、1958年)。
- Blaug, M. [1997] *Economic Theory in Retrospect*, 5th ed., Cambridge University Press.
- Chipman, J. S. [1965a] “A Survey of the Theory of International Trade: Part 1: The Classical Theory,” *Econometrica*, 33, pp. 477-519.
- [1965b] “A Survey of the Theory of International Trade: Part 2: The Neo-Classical Theory,” *Econometrica*, 33, pp. 685-760.
- Haberler, G. [1930] „Die Theorie der komparativen Kosten und ihre Auswertung für die Begründung des Freihandels,“ *Weltwirtschaftliches Archiv*, 32, pp. 349-370.
- [1936] *The Theory of International Trade*, translated from the German by Alfred Stonier and Frederic Benham, Hodge.
- Hicks, J. [1946] *Value and Capital*, 2nd ed., Oxford University Press. (安井琢磨・

- 熊谷尚夫訳『価値と資本』岩波文庫, 1995年)。
- Hicks, J. [1982] "Introductory: LSE and the Robbins Circle" in *Money, Interest and Wages. Collected Essays on Economic Theory*, Vol. II, Basil Blackwell, pp. 3-10.
- Kaldor, N. [1934a] "A Classifactory Note on the Determinateness of Static Equilibrium" in Kaldor [1960].
- [1934b] "The Equilibrium of the Firm" in Kaldor [1960].
- [1935] "Market Imperfection and Excess Capacity" in Kaldor [1960].
- [1960] *Essays on Value and Distribution*, Duckworth.
- Kindleberger, C. P. [1968] *International Economics: 4th Edition*, Richard D. Irwin Inc. (相原光・緒田原涓一・志田明共訳『国際経済学第四版』評論社, 1972年)。
- Krauss, M. B. [1979] *A Geometric Approach to International Trade*, Basil Blackwell. (池間誠監訳『図解国際経済学』文眞堂, 1981年)。
- Leontief, W. W. [1933] "The Use of Indifference Curves in the Analysis of Foreign Trade," *Quarterly Journal of Economics*, XLVII, pp. 493-503.
- Lerner, A. [1932] "The Diagrammatical Representation of Cost Conditions in International Trade" in Lerner [1953].
- [1934a] "The Diagrammatical Representation of Demand Conditions in International Trade" in Lerner [1953].
- [1934b] "The Concept of Monopoly and the Measurment of Monopoly Power" in Lerner [1953].
- [1936] "The Symmetry between Import and Export Taxes" in Lerner [1953].
- [1937] "Statics and Dynamics in Socialist Economics" in Lerner [1953].
- [1944] *The Economics of Control, Principles of Welfare Economics*, Macmillan. (桜井一郎訳『統制の経済学——厚生経済学原理』文雅堂書店, 1961年)。
- [1952] "Factor Proportions and International Trade" in Lerner [1953].
- [1953] *Essays in Economic Analysis*, Macmillan & Co. LTD.
- Marshall, A. [1923] *Money Credit and Commerce*, Macmillan. (永沢越郎訳『貨幣信用貿易』岩波ブックサービスセンター, 1988年)。
- [1930] *The Pure Theory of Foreign Trade*, London School of Economics and Political Science. (杉本栄一訳「外国貿易の純粹理論」『マーシャル経済学選集』所収, 日本評論社, 1940年)。
- Meade, J. E. [1952] *A Geometry of International Trade*, Allen & Unwin. (岡田睦美訳『国際貿易の幾何学』文雅堂, 1963年)。

- Ohlin, B. [1933] *Interregional and International Trade*, Cambridge, Mass., Harvard University Press.
- Robbins, L. [1934] "Remarks upon Certain Aspects of the Theory of Costs" in Robbins [1997].
- [1935] *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 2nd. ed., Macmillan. (中山伊知郎監修, 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957年)。
- [1971] *An Autobiography of an Economist*, Macmillan.
- [1997] *Economic Science and Political Economy Selected Articles*, ed. by Susan Howson, New York University Press.
- Robinson, J. [1971] *Economic Heresies: Some Old-Fashioned Questions in Economic Theory*, Basic Books, Inc. (宇沢弘文訳『異端の経済学』日本経済新聞社, 1973年)。
- Rosenstein-Rodan, P. N. [1934] "The Role of Time in Economic Theory," *Economica*, N. S. I, pp. 177-197.
- Samuelson, P. [1948] "International Trade and the Equalization of Factor Prices," *Economic Journal*, 43, pp. 163-184. (高山晟訳「国際貿易と要素価格の均等化」『サミュエルソン経済学体系 5』勁草書房, 1983年)。
- [1949] "International Factor-Price Equalisation Once Again," *Economic Journal*, 59, pp. 181-197. (高山晟訳「国際要素価格均等化再考」『サミュエルソン経済学体系 5』勁草書房, 1983年)。
- [1956] "Social Indifference Curve," *The Quarterly Journal of Economics*, pp. 1-22. (酒井泰弘訳「社会無差別曲線」『サミュエルソン経済学体系 7』勁草書房, 1991年)。
- [1964] "A. P. Lerner at Sixty," *Review of Economic Studies*, 31, pp. 169-178. (太田誠訳「60歳のA・P・ラーナー」『サミュエルソン経済学体系 9』勁草書房, 1979年)。
- [1971] "Ohlin was Right," *Swedish Journal of Economics*, 73, pp. 365-384.
- Scitovsky, T. [1984] "Lerner's Contribution to Economics," *Journal of Economic Literature*, 22, pp. 1547-1571.
- [1998] "A. P. Lerner" in *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, eds. by John Eatwell, Murray Milgate, Peter Newman, Macmillan, pp. 167-169.
- Vanek, J. [1962] *International Trade: Theory and Economic Policy*, Richard D. Irwin, Inc. (渡部福太郎・島野卓爾・貝塚啓明訳『国際貿易——理論と政策』東

洋経済新報社, 1963年)。

Viner, J. [1937] *Studies in the Theory of International Trade*, George Allen & Unwin.

伊藤元重・大山道広 [1985] 『国際貿易』岩波書店。

熊谷尚夫 [1957] 『厚生経済学の基礎理論——増補版』東洋経済新報社。

—— [1978] 『厚生経済学』創文社。

桜井一郎 [1961] 「訳者まえがき」(『統制の経済学——厚生経済学原理』文雅堂書店, 1961年)。